音楽科　研究主題

表現する喜びを実感できる児童の育成

三　橋　博　道

〈研究概要〉

本研究では、児童が自ら学習を進めることを視点に据え、音楽表現をする喜びを実感することのできる児童の育成を目指した。具体的には、①学習過程を工夫して音楽科の学習に見通しをもてるようにすること、②児童の学び方について価値付けをしたり、よりよい学び方について提案したりすることを手立てとして講じた。

成果として、児童の中に音楽科の学習におけるサイクルが確立され、既習と目の前の教材を結び付けながら主体的に学習に取り組む姿が見られた。そこには、表現に対する思いや意図を互いに伝え合いながら表現する喜びを実感する児童の姿が見られた。

〈キーワード〉

表現する喜び、主体的に学習に取り組む態度、学習過程の工夫、価値付け

Ⅰ　研究主題について

1　主題設定の理由

本研究で目指す児童は、音楽表現をする喜びを実感できる児童である。私は、音楽表現をする喜びを実感することで、日常生活の中においても、言葉にできない感情を音楽表現の中に見いだしたり、他者とともに音楽表現をすることで心のつながりを感じたりすることができるようになると考えている。そしてこれらは、小学校学習指導要領音楽編（平成２９年）の目標に示されている「社会や生活の中の音や音楽と豊かに関わる」姿であると考える。

このような児童の育成を目指した理由は、これまでの研究からである。昨年度は、知識と思考力、判断力、表現力等との関連について研究を進めてきた。成果として、音や音楽について知覚・感受したことを可視化し、思考を整理することで、活用できる知識を習得することができた。また、音楽を形づくっている要素における既習事項を想起する学習場面を設定したことで、得た知識を活用して思考、判断する姿が見られた。一方で、児童が主体的に表現を広げたり、深めたりする姿があまり見られず、音楽表現をする喜びを実感できていないことが課題として残った。これは、教師が主体となって、学習過程を構築してきたことが原因であると考えられる。なぜなら、これまで私は、音楽科の学習過程を作成するにあたって、音や音楽との出会いの瞬間を重視するあまり、児童が学習の見通しをもって学習に取り組むことが少なかったからである。その結果、児童が自ら学習を進めることができていなかったと考えた。

そこで本研究では、児童が自ら学習を進めることを視点に、研究を進めることとした。題材を通して、要となる音楽を形づくっている要素を拠り所とし、児童が題材を通して主体的に思考、判断し表現する学習過程を構築することで、学習に見通しをもち、自ら学習を進めることができるようにした。具体的には、まず、題材の要となる音楽を形づくっている要素に関わる既習事項や経験を想起する場面を設定することで、児童がこれまで何を学んだり、どのような音楽経験を積み重ねてきたりしたのかを振り返り、これから何を学びたいかを明らかにした。次に、音楽を形づくっている要素の働きについて知識を広げる場面を設定するようにした。最後に、自分なりの音楽表現を思

考、判断し、表現する際に、習得した知識を生かす場面を設定し、音楽表現に対する思いや意図をもったり、音楽のよさを見いだしたりすることができるようにした。このような学習過程を、年間を通して積み重ねていくことで、児童が学習に見通しをもって主体的に取り組むことができると考えた。さらに、その学習過程の中で児童がどのように学んでいるのかについて捉え、価値付けをしたり、よりよい学び方について提案したりしていった。これにより、児童が「どのように学ぶか」を自覚し、主体的に学習に取り組むことができるようになると考えたからである。このような学習を積み重ねることで、児童が自ら学びを進め、表現する喜びを実感できるようになると考えた。

以上のような考えから、本研究主題を設定し、実践を通して検証を試みた。

２　教科の研究主題との関わり

本校音楽科では、「自分の見方で音楽に向き合う児童の育成」を研究主題として掲げており、音楽を多面的・多角的に捉え、より音楽の美しさを追及する姿を目指している。本研究における音楽を形づくっている要素の働きについて知識を広げる場面は、児童が「自分の見方」を働かせるために、音楽を多面的・多角的に捉えている場面である。また、知識を自分なりの音楽表現に生かす場面は、児童がよりよい演奏にするために音楽の美しさを追及している場面であり、これは、音楽に向き合う姿と言える。以上のことから、本研究は教科の研究主題と関わっている。

３　主題にせまるための方策

研究主題にせまるため、次のような研究の視点と手立てを考え、実践を行う。

視点
　児童が自ら学びを進めることで、表現する喜びを実感できるようにする。

＜手立て＞

(1)　児童が自ら学びを進めるために、音楽科の学習に見通しをもつことができるようにする。具体的には、題材を①音楽を形づくっている要素に関わる既習事項や経験を想起する場面、②音楽を形づくっている要素の働きについて知識を広げる場面、③知識を自分なりの音楽表現に生かす場面、の３場面で構築し、学習に見通しをもつことができるようにする。

(2)　児童が自ら学びを進めるために、児童の学び方について価値付けをしたり、よりよい学び方について提案したりするようにする。具体的には、手立て(1)①～③のそれぞれの場面の中で、既習事項や生活経験を生かしたり、粘り強く音楽表現を考えたりしている姿を捉えて価値付けたり、児童に適した学び方を提案したりするようにする。

【検証方法】

以下のような児童の姿が見られたかについて、記述内容や授業中の観察、記録映像から検証する。

・手立て(1)について

　授業の導入場面で学習の見通しをもつ際に、既習事項を生かして歌唱表現の工夫をしようという見通しをもった記述ができていたかについて検証する。

・手立て(2)について

（下線部は同一時間では見取りにくいため、本時内ではこの検証は行わない。）

　児童が音楽表現を工夫する際に、既習事項や生活経験を生かして考えたり、何度も音楽表現を試していたり、他者とともに考えたりしている姿を価値付けることで、児童が自ら学びを進めることができていたかについて検証する。また、児童によっては、よりよい学び方を教師が提案することで、自分に合った学び方を選択しているかについて検証する。